



広島工業大学

同窓会誌

第12号

昭和53年



広島工業大学学歌

歌詞 広島工業大学選定
作曲 井上 佳

緑なる

緑なる三宅

深きいわれの

御倉を開き

倫哲愛を誇る

我等が学府

見よや行くて

精気の学士

研学の道

寄りてぞ極む

ああ

広島工業大学

目 次

※提 言

母校の新定員と新学科、私のこと	山 本 博	1
-----------------	-------	---

※会員だより

雑 想	戸 川 誠	3
河喜多能一先生の思い出	猪 上 憲 治	4
中小企業の良さ	井 藤 芳 夫	6
母校をたずねて	神 原 大 二	7
雑 感	山 野 行 昌	8
私の短い履歴書	前 崎 俊 幸	9

※支部だより

昭和52年度広島工業大学同窓会	11
-----------------	----

※準会員だより

スポーツ講演会	12
第12回大学祭ラリー	12
オープンサイクリング	13

※学園だより

学園教養講座 (Cultural Seminar) について	14
1. 学園教養講座 (Cultural Seminar) の開催意義	鶴 裏 14
2. 昭和49年11月 (第1回) から昭和52年12月 (第26回) までの演題と講師	16
3. 第23回学園教養講座の概要	17

※大学だより

クラブハウスの建設	20
-----------	----

※学内ピックアップ (学内報“広島工大”より)

美しき廊下 (つつじ) の学園	津 村 喜代治	21
ツメ込み教育大賛成	林 公 重	22
ちえの光	辰 宮 栄	23

※同窓会本部だより

昭和52年度議事録	25
-----------	----

会計報告

昭和52年度会計中間報告	26
同窓会奨学金報告	27
同窓会会則	30

第13回卒業生名簿	33
-----------	----

附 教 職 員 名 簿

母校の新定員と新学科,私のこと



広島工業大学同窓会顧問

山 本 博

広島工業大学同窓会の目的の第1は“本学の建学精神（教育は愛なり）と教育方針（常に神とともに歩み，社会に奉仕する）を同窓生を通じて社会に広めていくことである”この目的に向って常に努力している卒業生諸君のことを思うときに，教師としては母校の教育をより向上させ，研究をより充実さすべきだと考える。

母校は昭和38年に電子工学科，電気工学科を，39年に機械工学科を，40年に土木工学科，建築学科を，41年に経営工学科を開学し増設して以来，総長鶴先生のなみなみならぬ御努力と，教職員の広工大を思う熱意とによって，大学らしい風格をもってきた。誠に喜ばしいことである。学生募集要項とともに受験生に送る，1978年版広島工業大学要覧を是非一読ありたい。母校のその後の発展ぶりがよく理解でき心温むるものがある。

新定員と新学科

故田中重芳先生（元広工大機械工学科教授，元広島高等工業学校教授，この時代の恩師）と共著の機械工作法講話全4冊は絶版である

が，この本はあまりにも頁数が多いので1冊にまとめたのが，現在までも教材として使用した“標準機械工作法”（産業図書，390頁，初版昭和12年）は産業構造が変り，技術革新にもなつて，35年，41年，47年と改訂はしたが，「未だに古典に属するものが多いが温故知新の実をあげてもらいたい」と改訂を要求して下さった二三の大学の先生方には新しい技法などに関しては先生方で原稿を作つて学生に教え下さいませんかと返事をだしたことがあつた。そんなこともあつて専門書としては現在でも，よく売れているようである。有難いことと思ひ感謝している。

この本に“原料に加工してわれわれが用いて都合のよい品物をつくる技術を論ずる学問が製造学（Technology）である”と書いたがこれは狭義の工学の一つでここでのいう原料とは無生物のことである。

さて工学という言葉の意味を一口でいえば，科学に技術を取り入れたものである。つぎに工業という意味は生産することの一手段である。棚沢泰先生は工業を次のように説明さ

れている。生産は無生物を取扱う工業と、生物を対象とする農業、水産業、畜産業などに分けられる。工業は機械力を主力とする製造工業、資源の開発に重点をおく採掘工業（これは開発工業と考えたら広義となりはしないか）家屋や構造物を作る造営工業などに分けられる。いわゆる工業は技法（Know How）を主体とする工業技術と学問的色彩の濃い狭義の工学によって達成されるものであると。

現在の母校工学部の各学科の内容からこれを系列化してみると、電気系としては電子1クラス、電気1クラスで2クラス分、機械系は機械が2クラス分、土木や建築を建設系と考えるなら、3クラス分となり、経営系は経営の1クラス分となっている。そこで4系列とし各系列を2クラス分とすれば、1クラスの人員が120名ならば合計960名となる。大学当局では、建築学科を1クラスとし他の1クラスを新設学科に移行さす問題について検討されている。

高度成長にこたえて毎年約1,000名の新入生を迎えており、水増入学は私学の常であったが、最近（昭和45年より）になって私学に国庫補助金が交付されることになり、交付金の公平を計るため、私学学生の実数を把握するためにも、定員制を要望し、母校もこれにこたえて52年度から定員増が認められ、電子140名、電気140名、機械240名、土木140名、建築140名、経営140名、合計940名が新定員となった。創立当時の定員は各科80名計480名であったから、新定員は2倍である。

多人数教育の弊害は同窓生諸君は身にしみており、教員の方でも140名では困ったものだと思う。そこで前述のように120名位のクラス構成で、新設学科に関して、総長を中心として、系列化の問題、教育研究の問題、運営上の問題、将来性の問題その他に関して、新定員が決定して以来検討されつつある。

同窓生諸君も、どんな内容をもったカリキュラムで勉学した後輩が欲しいか、今後社会

に適合するにふさわしい学科名は何か、などについて、立派な立案をし母校に提出されたい。よりよき学園となるためにも。

これからの私

私ごとで誠に恐縮であるが、本年3月で満76才となり、教師となってから55年がなんとなしに過ぎた。やっと生きる道がわかってきたような気がする。

広島高等工業学校（広大工学部前身）機械工学科の第1回生（昭和12年3月卒）で卒業と同時に学校に残してもらった。そうして2人のよき恩師に恵まれたこと、今更ながら喜び感謝している。1人は故藤野準先生で熱工学が御専門であった。人間性の豊かさ、心のよりどころなどに関して教えを受けた。いま1人は故田中重芳先生で御専門の機械工作法に関して熱心に御指導を受けた。未だに御恩にお報いできないのを残念に思っている。昭和42年工大にお世話になり、機械工学科第1回卒業生（昭和43年）が母校に残っている方々の指導を、どの程度したかを思い出してみるときに私の恩師に対しても申し訳ないと反省している。

さて、神は愛なり、教育は愛なり、美しい言葉であり、真実の言葉は力である。何度も何度も繰り返して言っているうちに心あたたまるものを感じる。

一にも徳、二にも徳、三にも徳、徳を積んで人生に希望を持ち、一日一日を感謝し、今日は再びこないのだから大切にしたい。一日に一滴でもよいから徳を積み、そうして積み重ねてゆきたい。そねみ、ねたみ、悪くち、かげぐちなどの重たい荷物は少しでも落して軽くして歩んで行きたい。心の喜ぶ軽い荷物は沢山持って歩んで行きたい。大自然の恵み、教え、祖先の恩に神や仏を通して心から感謝し御礼を申しあげたいものである。

(53.2.3)



雑 想

42年度電子工学科卒 戸 川 誠
戸川写真サービス

同窓生の皆様にはお元気にご活躍の事と拝察申し上げます。同窓会事務局より寄稿せよとの仰せに、私如きがおこがましい限りですとのお断りしましたが、蛮勇を奮って投稿させていただきました。

学生時代に学業優秀とは縁遠かった私に似つかわしく、短大当時の回想や失敗談でもと思い、2つの事柄を思い出しつつ拙文を進めたいと思います。

短大入学時を想えば私より遙かに年の多い方が大勢居られ、どうなる事かと心配しましたがお付合いさせて戴く内に、そういった年の壁は取れ、学友間の親交は心の通い合った本当に親密なものがあったと思います。

設立当時の通学路は現在のバス路で雨がふれば泥地と化し、雪がふればツルツル滑って歩くも儘ならぬ事が多々ありました。現在では学生が車を所有しているのは珍しくありませんが、当時ではオートバイが精々で250ccに乗っていれば注目の的でした。

さて今でも苦笑交りに思い出しますが、故久保進先生の授業でありました。古武士の風格を備えられた先生のお顔は今でも鮮やかに浮んでまいります。時は5月、世は春爛漫といった季節で、桜花も満開といった風情の頃でした。教室は日向ぼっこという状態で、私は一番前の机に座っていました。余りの眠けさに顎を支えていた肘がいつしか枕に替っ

ていました。突然バーンと大きな音と頭部に異状を感じた私は飛び起き、すぐに事態を悟りました。先生の手には教科書ならぬ出席簿が握られていたからです。「無礼者、一番前で寝るヤツがおるか」大層ご立腹の様子で一喝されました。それ以来一番前に座る事はなかった様に思います。

学生と言えばパチンコ、マージャン、酒…とありますが、私は酒で大失敗をしました。某先生と学友数人で裏山のゴルフ場に行って酒盛をやった時です。飲み方を碌すっぽ知らない私がイキがってコップ酒をやったものですからたまったものではありません。帰る頃にはへべレケになって仕舞い、楽々園電停までどうして行ったのか気が付いたらベンチに座っていたと、その後友人と笑話をしました。家に着くや、入口でダウンし、家人に部屋まで担ぎ込まれた次第でした。それから一晩中ゲェゲェと地獄の苦しみを味わい、もう二度と酒は飲むまいと後悔頻りでしたが今もって懲りずに飲んでいます。

短大より4年制大学に編入学した頃よりクラブ活動(写真部)に専念?する余りに授業には出ず、暗室ばかりにいて、到頭第1回目の留年生という輝しい名誉に浴する事に成りました。そして存分に青春を謳歌し、又悔多き6年間の学生生活を昭和42年3月に(第1期入学、第2回卒業)とい結末で終り、その

1年後に今流行の脱サラをし、趣味を活かして商業写真をと開業、それ以来工大の卒業アルバム製作を中心に、学内の諸行事撮影等で年中出入をさせて戴き、現在に至って居ます。今日まで御指導、御鞭撻を賜りました諸先生方、並びに在学中には多大なご協力を戴きました同窓生の皆様に、この紙面を拝借しまして深くお礼申し上げます。今後とも、技

術の研鑽に努め、より良き母校のアルバム製作に邁進する所存でありますればお気付きの点がありましたらご教示戴ければ幸甚です。

最後に、この深刻な不況に直面している日本経済の状況下に第一線でご健闘されている同窓生皆様の今後のご飛躍とご多幸を心よりお祈り申し上げつつ、私の拙文を終らせて戴きます。

12月15日記

河喜多能一先生の思い出

42年度電気工学科卒 猪 上 憲 治

昭和52年11月22日、電気工学科の初代主任教授として在任され、電気工学科の基礎を形成され、その後の発展の礎えとなられました河喜多能一先生が、享年79才をもって天上の神となられました。ここに、電気工学科同窓生一同謹んで先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。告別式は、11月24日広島市昭和町伝福寺におかれまして、先生の生前の御活躍、御人柄が忍ばれるがごとく鶴理事長（総長）前川学長、広島大学竹山学長、頼実工学部長をはじめ多数の参列者のもとで盛大な中にもしめやかに行なわれました。なお、中原同窓会会長も御霊に悼辞を捧げられました。

思えば、一昨年は久保進先生の死去に、そして今年は河喜多能一先生の死去に接しましたことは、私達同窓生にとって心の支えを失った感が致し誠に寂しい限りであります。電気工学界で御活躍され、数々の御功績を残されました偉大な両先生が、高令で御健康に勝れておられないにもかかわらず、歴史の浅い本大学の発展のためにと日夜労を惜しまれず親

身になって講義に、卒業研究に、就職にと御教授、御指導下さったことは、必ずや、同窓生の社会での活躍となって反映されるものと思います。

ふり返ってみますと、今日でこそ母校「広島工業大学」も中四国地方有数の大学へと発展し、全国的にも工科系大学の一つとして名を連ねていますが、創設当初は単なる田舎大学としての存在であり卒業生に対する社会の理解は非常に低いものでありました。そのような厳しい環境の中で社会へ果立っていった卒業生の心の支え、あるいは誇りの一つは、「在学中に偉大な先生に親しく御指導いただき、数々の御教訓をさずかることができた」ということであり、その教訓を実践にうつすことでありました。この意味におきまして、創設まもない頃の卒業生にとりましては、両先生の御死去の報に一層の深い悲しみをおぼえ、そして胸に一つの誓いを刻むものであります。

私は、卒業後も幸いにして河喜多先生の御指導を受ける機会に恵まれたので、卒業

後の思い出も含めて徒然なるままにふり返ってみたいと思います。

学生時代の思い出としましては、先生の講義には定評があったことであります。すなわち、講義中の先生は常に穏なお姿で、学生の雑談による騒音にも“我人に関せず”の如く注意されるでもなくひたすら講義に熱中されたものであります。しかしながら、不思議と、講義に熱中されているお姿に接しているうちに必然的に学生同士注意し合って静粛にしたものであります。このことは、学生を大人として見做されて、いつぞや受講の意味を悟り自覚するであろうことを見越されていた感が致します。また、先生の試験内容は、教科書の末巻に記載されている演習問題が常に出題され、学生にとっては“山”がかけやすく安易に思える試験の一つでありましたが、今もって考えてみますと、安易に思えたからこそ学生も勉強し、かつ自信をもつことができたものと思え感嘆致し、また演習問題の実際性をも痛感する今日であります。

卒業後の思い出としましては、先生は、講義前必ず2～3時間身動き一つされず予習されていました。先生ほどの高知識者で、名教育者であられるお方が何故それほどまでに………と思ってお尋ねしてみますと、「今でも如何に講義すれば学生が理解しやすいかを考えているから」とのことでありました。私は、ここに教育者としての真髓、教育の深さを知らされた感が致しました。また、先生は、研究面に関しましては「研究とは自分自身との戦いである、従って決して妥協は許されない」と言われ、私達あるいは卒研生に対し厳しく指導されました。また常日頃、“健康”

であり、“人の和”を保てる人物すなわち人間性豊かな人物になるよう訓話されていました。この御訓話は、河喜多杯争奪ソフトボール大会及び電気工学科のモットー“和”として具体化され、現在も継続されています。なお、思い出の中でただ一つまだ理解できかねる出来事があります。それは、ある年の冬に、私が先生より遅れて登校した時、研究室のドアを開けるやいなや啞然としました。室内には、ストーブの調整不良が原因で薄暗くなるほど黒粉が降り注いでおり、急いで調整し直しました。そして、ふっと先生の机の方角に目を移しますと、先生はいつものように整然として机に向われて講義前の予習を行っておられるのであります。私は、このお姿を拝見し、また啞然としたのであります。予習に熱中され過ぎてお気付になれなかったのか、ストーブの調整法がお解りにならなかったのか、それともお身体がそれほど勝れておられなかったのか、その理由をお尋ねするすべもなく他界されました。何時必ず、私が地獄に落ちない限り先生にお会する機会が来ますので、その時には明確にその理由をお聞きしようと思います。

思い出を書き綴っておりますと、色々と脳裏に写し出されてきますが、最後に「先生は、教壇にとどまらず、研究室、家庭までも全てが“教育の場”であられ、先生の会話、行動全てが“教育は愛なり”そのものであられました」ことを明記させていただき終りたいします。

50余年の長きに経る教育歴からみますと、本大学に御在職された期間は、非常に短いものでありましたが、長年つちかわれてこれ

ました先生の教育、研究、そして人生訓の頂点を本大学に残された親が致し、この偉大な御遺産を幾代までも大切に保存して行くこと

が同窓生に課せられた義務、責任であると思っています。

先生、安らかにおねむり下さい。

中小企業の良さ

46年度機械工学科卒 井 藤 芳 夫

大学を出て早や7年が過ぎようとしているが、学生時代の友人と語る度に、その時の出来事が楽しく思い出されもう一度、学生時代に戻りたい様な気になる。

さて私は今、従業員70名程度の小さな会社に勤務し、部下が数名いる。卒業後すぐに、この会社に入ったわけではなく、最初、大阪の従業員1,500名位の会社に就職し、2年半ほど勤務の後、広島に帰り、今の会社に再就職した次第である。前の会社を退職した当時は、まだ若く、反骨精神旺盛で、その会社のムードに、いや気がさし、さっさと辞職してしまったが、今思えば、入社の際、推薦して下さった先生に、大へん申しわけなく思っている。昔より、「寄らば大樹の陰」ということわざがあるが、いうまでもなく大企業の良さは、大きいゆえに安定しているという事である。それに対し、中小企業は、不安定かというて決してそうではない。要は、内容の問題で、中小企業には、外観からはわからない良さがある。今の会社に就職してまだ数年にしかないが、その中から経験した、中小企業の良さというものを、在学中の諸君に知って頂き、今後の参考になればと思い、ペンを取った次第である。

まず第1に、中小企業の良さは、自分の思い通りの仕事ができる事である。中小企業と

いうものは、スタッフも少なく、企画、設計、手配と、色々な事を一人又は、数人でする事が多く、それだけ自分の考えを反映することが出来る。反面仕事に対する責任は重く、又仕事量も多く、出勤日だけでは消化しきれず、休日も返上で、仕事をする事も多い。こういう事を書くと、苦勞が多いと感じるかもしれないが、内容も知らず、その仕事の一部を担当するより、始めから、終りまで、自分の力で仕事を進めて行く方が、よほど充実感があると、私は思う。中小企業での一人は、大企業での何千分の一に対し、はるかに、大きな位置を占め、自分の力で、その会社を、大企業にする事も夢ではない。

第二に、中小企業の良い所は、小世帯である為、家庭的であり、意志の疎通が早いという事である。会社の従業員は、皆顔見知りであり、仕事を頼むにしても、受けるにしても、面倒な手続は不要で、仕事がスムーズに進む事が多い。又、ある程度の責任ある地位になると、自分の範囲以外の業務にも参加出来、場合によっては、自分の意見で会社が動き、会社というものを身近に感じる事が出来る。

以上、少なくとも申しわけないが、今後の就職を考える際に、何かの足しになれば幸いである。大企業を選ぶか、中小企業を選ぶか

は、諸君の自由だが、サラリーマンになる以上は、重要な問題であり、十分に検討し、自分に合った会社を選んで頂きたい。

私の体験より、もう一つ書かせてもらうと、就職後、何らかの理由で、転職を考える様になったら、最低、2年間その会社に留まる事をすすめる。2年間あれば、だいたい仕事の要領、進め方を覚える事が出来、その事

は、次の会社に就職して非常に役立ち、決して損にはならない。特に、中小企業に再就職する場合、中小企業は、教育スタッフ、及び時間が少なく、新入社員に対し、十分な教育が出来ない為、経験者は、歓迎される。

学生時代は、青春の頂点であり、在学中の諸君は、有意義な学生生活を送ってもらいたい。

母 校 を た ず ね て

50年度土木工学科卒 神 原 大 二

先日1年数カ月ぶりで母校工大をたずねた。

卒業してから、もうこんなにも時がたってしまったのか、と思うぐらい早く毎日が過ぎてしまった。卒業してまもない頃は、学生時代がなつかしく思え、仕事のいそがしさから解放されそうになると次の日曜日には大学へ行ってみよう、青春の1時期をすごした広島町の町へ、五日市へ、廿日市へとよく思ったものであった。そこには今の生活とはちがう、学生であるがゆえにゆるされた独特の自由があり、今そこをたずねる事により昔の自分にかえりなつかしさにひたれるような気がしたし、今の自分を見つめるのにも最適なような気もした。今私の住んでいる所は尾道なので距離的にはさほど遠くはないが、なかなか仕事の方がいそがしく思うようにいかない。一般的に言われているように「働き出すと自由な時間がもてない。」この事は私についてもあてはまるらしい。「ゆったりとした時間がほしい。」こんな事も学生時代をなつかしく思わせる原因なのかもしれない。

ところで、大学をたずねた時は大学祭の期間であったので、学内のいたる所で催し物が行なわれていた。

なつかしい光景が目にはいり、ああやはり大学へ来たのだという実感がわいてきた。おかしなもので自分が学生時代にかえったような気がした。

学生時代お世話になった先生を尋ねてから、一通りざっと学内を見てまわった。何号館に当るのかは忘れてしまったが1番上の建物まで急な坂を登って行き、上の方から下の方へと見て下ったのである。急な坂を登りながら、クラブ活動でよくこの坂を走って上ったものだった。

工大の学生ならだれもが何らかの形で坂のイメージが残っているのではなからうか。

5号館、4号館と見てまわり、土木の会場へと移った。土木の会場では、測量器具の展示、映画、都市計画についてとか、高速道路の路盤についての模型などが展示してあり学生諸君のいろんな苦勞、1つの目標を達成するうえでの苦勞が目に見えるようであった。

私は学生時代あまり積極的にこのような行事に参加しなかったので、ほんとうの苦勞がどんなものであるかは知ることが出来ない。もしあの時やっていたら今の自分に何らかの形でプラスになっていたのではないだろうかと思うと残念なような気もする。学生時代に、あれもしなかった、これもしておかなかったと、数多いものが頭の中に上がってくる。

最近よく思うのであるが、やるべき事をやらずにはっておき自分自身を苦しめているの

ではないだろうか、自分のすべき事は何なのか、今やらなければならない事は何なのか、又それをどんな方法で行なうのが最適か、ほんとうに今という時を真剣に見つめているのであろうか？

それにしても、今回大学を訪ねた事は良かったように思う。大げさなようだが、大学は私にとって心のふるさとだと言えるのではなからうか。何らかの形で私に疑問を提議してくれるし、そこに立つだけで今の自分を見つめなおさせてくれる。

雑 感

52年度建築学科卒 山 野 行 昌

広島工業大学を卒業して8ヵ月が過ぎ、就職して初めての冬を迎える。現在は岩国市の市営アパート新築工事のために、現場事務所に寝泊まりをしている。現場事務所の間仕切壁は、わずか2mmと薄く、冬の到来を直接肌で感じるができる。日ごと厳しさを増す寒さの中で思う事は、金銭的には現在より貧しかったが、太平楽で自分の好きな事ばかりやっていた学生時代の事である。

春、友人と旅行に行つて騒ぎ、夏には炎天下の中で卒業論文のために広島周辺の住宅団地を歩き回り、相当の住宅団地通になった。秋は秋で、大学祭の準備で飛び回り、冬は、ゼミ室のストーブにかじりついて住宅論をブチ上げたりした。今にして思えば、よくもあんなに好きほうだいに行動したものだと思心するし、それに必要な時間も充分にあったものだとも考える。今学生時代を振り返って、

一番すばらしいと思う事は、やはり時間が有り余るほどあったという事である。就職してしまうと、自分の時間と言うものが極端に減り、やりたい事もついおっくうになってなかなか行動に移れなくなってしまった。

しかし、自分の時間が激減しても、いくら間仕切壁が薄くとも、日を追って出来上がっていく建物を見ているとなんとなくいとおしい様な、誇らしい様な気分になってくる。それに工大も10回目の卒業生を社会に送り出し、そろそろ、何処へ行っても工大の先輩がいらっしゃるという状況になって来た。やはり先輩だという事になると、一度も面識はなくとも、「アア、君も工大かア。あの坂道には4年間苦勞させられたなアー。」と、話も弾み、すぐに心安くなり、自分の社会の輪が一段と広まったような気分になれる。

私も工大を卒業して、ようやくOBの末席

に座ったばかりであるが、来年度からは、
「そういえば、あの心臓破りの坂は、大変だ

ったなア。」という具合に、良き先輩になろう
と思う。

私の短い履歴書

47年度経営工学科卒 前 崎 俊 幸

大学を卒業して、5度目の春秋を迎えた。
5年という一つのくぎりである。短いなが
らも、ふり返ってみると種々の事が思い出さ
れる。

私が入社したのは、東光という、電子部品
メーカーで、東証一部に上場しているもの
の、会社組織がまだまだ充分に固っていない
中企業である。

3カ月の研修を終えるとすぐに仕事が分担
され、女子2名を使つての業務に就いた。仕
事は、注文納期にあわせて国内11工場、海外
4工場の生産能力に割りふり生産計画を立て
ることで、当然その生産計画したものの進度
管理も行なった。この業務は、自分で製品を
作るわけでもなく、自分で輸送するわけでも
なく、自分でセールスしているわけでもなく、営
業と製造部所の間に入って、両者の機能を充
分発揮させるよう緻密な連絡によってフォロー
する事であった。

入社した年の秋までは、まだ大きく成長を
続ける経済環境の中であつて、東光も、受注
は生産能力を上回っており私の仕事も残業、
残業でようやく消化していた。

しかし、その年の秋、突然襲ってきたオイ
ルショックで注文は激減した。「大きくなろ
う」と叫ばれた時代は去り如何に生産を調整
し、在庫をへらしてゆくかが、最大の課題と

なった。会社の方針は次のようにあげられ
た。

1. 設備投資しない
2. 人員採用しない
3. 休日出勤、残業の禁止
4. 納期遅れの絶滅
5. 在庫低減
6. 経費節減

こうした方針の下で、我々の業務も、納期
管理の徹底が叫ばれたが、注文内容は、経済
の動向と相俟って、徐々に納期の足を短くし
ていった。昨日の納期の注文は、納期を守れ
ないが、今日、明日の納期なら納期を確保し
ろとまで言われ、短納期受注の処理に振り回
わされることになった。こういった注文は、
他の注文にも影響して、生産計画そのものを
大きく変更させていた。いずれ景気も良くな
ろうと思っていた経済環境は、更に悪化し
て、一時帰休が実施された。そして、続いて
希望退職を募るような状態にまでなった。

しかし、皮肉なもので、希望退職を実施し
て、何カ月もたたないうちに、アメリカ市場
で、CB（市民バンド）無線が、爆発的な流
行となり、輸出無線製造メーカよりの注文
が、激増、フル生産を強いられる事になつ
た。しかしそれまで生産能力を大幅にカット
している為、受注の急激な立ちあがりにはと

ても追いつけず、納期遅れは、莫大な数にのぼった。この遅れは更に客先の見込み追加注文となって、かつてない注文をかかえ込み、これらの注文を如何に処理するかが、我々の当面の課題となった。しかしこの時期、我々は生産管理の機能を失っていた。客先から、製造ラインストップの連絡が続き、その連絡で、急遽今まで製造していたものをやめて、その客先のものを作るといった泥縄式に終始していた。

この時期、トップよりこのままの姿勢で客先に迷惑をかける事は、経営として問題があると、長納期注文をお願いするかわり納期は絶対確保する体制をとると宣言された。しかし、この体制を敷いても、生産管理体制がそれを十分にフォローしきるものでなければならず、新生産管理システムの開発が求められ、プロジェクトチームが作られた。そして、私もこの一員に加えられた。システムの開発は、業務処理の人的処理から機械化への移行を順次行なっていった。従来行っていた業務の大半は、十分に機械化できるものであり、殊に、進度管理に費やす時間は、その業務が納期に直接影響するだけに、重要でかつ時間のかかる業務であった。この進度管理を第一歩に始めた。コンピュータを使用する事で、従来納期確認にかけていた莫大な時間は、タイピングする極く短い時間におきかわった。生産の開始日から倉庫入庫日まで、国内、海外を問わずに照合できるわけである。また、同時に全体的な進度管理が即座に把握できるのである。

一つのシステム開発は次から次へと新しい情報をもたらしてきた。東光のような、部品

メーカーでは、生産形態が、受注生産で、かつ多品種少量生産の形態をとっているためにこの種の進度管理が、非常にネックになっていた。時には専任の進度管理者をつけ納期フォローにあたらせていた。この進度管理システムが概ねシステムとして固まりつつある時、社内で開発のマイクロコンピュータを使って生産計画を行なうシステム開発にとりかかった。ロボット用には既に使用されていたが、事務用として使用し、ディスプレイ、プリンター、キーボードをとりつけるのは初めての試みとなる為、実に筐体設計から取り組む事になった。

営業が受注すると即日、パンチカードにして受注票を発行し、そのカードをこのマイコンで処理し、どの工場で何日何個、生産計画を組んだかカードに印字、同時にその情報を製造部所、営業に送るというもので、カードは、出荷カードとして再使用するこのシステムができあがるまで1年を費やした。これで、生産管理の生産計画から進度管理までの業務の機械化が進められて従来女子10名がかかっていた業務が、オペレーターの2名でできるようになったのである。システムには最終的なものがないと言われるようにこれで満足できるものではないのだが、私なりに、一つの形を残してきたという気持がする。

今回、結婚し、全く新しい世界に第一歩を踏み入れ、気分を一新して今それに向かって進んでいる。

しかし、一体私は次の5年という節で、何を考え何ができ、何をやっているのだろうか。もし又5年後に静かに省りみたとき、一体、何を……

支 部 だ よ り

広島工業大学同窓会岩国支部

昭和52年度状況報告

岩国支部の結成から早4年目を迎え、会員各位の協力のもとに年ごとの発展又充実しつつある現在ですが、今年度も数々の事業計画並びに各委員会を重ね実施に当たっております。

支部会員も約80名と言う大規模なものになり執行部の運営も多忙であり、各々が勤務時間後の時間をもって方針決定又各会員からの意見、要望等を折り込み、議論し、実行委員会でもって計画する。

当支部の会則の通り支部会員の親睦を第一目標と致して居りますので、いかにして、より多数の出席者のもとに運営してゆくかと言う事が最大のポイントとなるであろう。

その一手段として、当支部では結成2周年のパーティーを市内のクラブフラミンゴを使用して行い、参加人員約60名で盛大であり経費も年会費の大部分を要した。

その他、海水浴、研修会等も計画しているが、それらの事業を毎年行うためには先ずレクリエーションを通じて活動する他はない。

53年度に於ては研修旅行を最大目的とし計画をしているが、何分にも運営面で資金がないため、会費の完納及び本部の助成金にたよる他はありません。

支部の充実が工大本部の充実であり又それ等によって広島工業大学の躍進に結ばれば、在学生又同窓生に於ても心強い組織となるよう努力する事が必要と思われる。

参考までに岩国支部の組織体制を述べると、会長、副会長の下に各部を置き、総務、指導、研修、レクリエーションの4部門に分かれ、各部長と委員(各々3名)それに相談役3名、監査役3名、顧問1名を設定し支部の発展に努めている。

——岩国支部総務委員会——

お 知 ら せ

諸証明手数料

種 別	料 金	種 別	料 金
健康診断書 (厚生課)	円 100	調査書 (教務課)	円 300
英文推薦書 (教務課)	1,000	英文による証明書 (教務課)	500
学業成績証明書 (教務課)	100	研究生修了証明書 (教務課)	100
卒業証明書 (教務課)	100	聴講生証明書 (教務課)	100
単位修得証明書 (教務課)	100		

..... 準 会 員 だ よ り

ス ポ ー ツ 講 演 会

体 育 会

第16回工大祭の一環として、体育会では11月12日午後1時30分より本学体育館に於て、スポーツ講演会を開催しました。講師として元全日本男子バレーボールチーム監督の松平康隆氏をお招きし、スポーツと人生について大いに語っていただきました。この講演会は本学学生に松平氏という超一流のスポーツ人に接してもらい講師の歩まれた覇気に満ちた人生の一部をかいま見ることにより、本学学

生のやる気をふるい起こさせるとともに視野を広げ、今後のスポーツ活動を盛り上げるとともに充実した学生生活を過ごしてもらおうと思い開催いたしました。当日は日頃体育会の各サークルで活動し、汗を流している学生ばかりでなく、スポーツを趣味とし、また興味をもっている学生とともに付近の女子大生、高校生がつめかけ場内あふれんばかりの人となりました。講師が体験から得たスポーツと人



生についての鋭い講演は聴衆の1人1人に深い感動を残したようであり、この講演会の目的はある程度達成することができたのではないかと思います。最後に今回の講演会を開催するにあたり、いろいろと御協力していただいた関係者各位に心からお礼申し上げます。

第 12 回 大 学 祭 ラ リ ー

自 動 車 部

去る11月3日自動車部主催の大学祭ラリーが、秋晴れのもと、紅葉で色づく県北の山中を含む県内全長約200kmのコースで競技は行

なわれました。

最近のラリーブームを反映してか、広島近県はもとより遠くは群馬からのエントリー者

を得て、総数55台が9時より、昨年優勝チームのゼッケン1番から正門前を順次スタートして行った。

ここで大学祭ラリーの特徴を述べてみると、このラリーはアメリカン方式によるタイムラリーであり、サファリやサザンクロスなどのスピードラリーとは異なる。つまり、交通法則にのっとり、与えられた指示速度でコースを走り、あるポイントから次のポイントまで時間通りに、いかに正確に走るかを数区間に渡り競うものであり、ドライバーの運転技術はもちろん、その他に誤差秒の修正のための計算能力、チームワークなどが競われま

す。

今年のラリーは、DAYラリーとしてはスタート率が高く、道が荒れていたのと、紅葉の季節のピーク時と重なり、対向車、ハイカーが予想以上に多く、苦しめられたと思われる。しかし、優勝チーム「みゆきちゃん」は減点0、総誤差秒52の好成績であった。

他のチームも減点が少なく、全体的に高い計算力をもったチームが増えたと思われる。又本学の学生の参加が多く、新たに学内賞が設けられた。ラリー車同志の接触はあったものの、大事はなく無事にラリーが終了したことをうれしく思います。

オープンサイクリング

サイクリング部

去る11月3日、サイクリング部主催によるオープンサイクリングが行なわれました。当日、42名の工大生、他の女子大生と多くの学生が広島城内に集まりました。

コースは、広島城から駅裏の車の少ない道路を通り、水分(みくまり)峡で昼食を食べ、海岸をって平和公園までの上り坂あり下り坂ありのなかなか変化の多い楽しいコースでありました。

上り坂では、汗を流し、上り切りペダルが自然に回る所までペダルを元気いっぱい踏んで、上で「フー」と息を抜く。そして、昼は自然の中で飯盒炊さん、滝の水で米を洗い、大きななべに大きなジャガイモを入れてカレーを作る。味はまずまず食べられる程度。平和公園では、記念品の大きなシャモジに今日の疲れもどこへやら、これに、寄せ書きした

り、自分の電話番号を書いたり、楽しい一日でした。

近ごろ、運動不足の人が多いが、晴れた日には、自転車に乗ってだれもない野原へ行って少し幻想的になるのもいい。また、買い物など自転車で出かけ近所の人と会って「こんにちは」と声をかけてみる。そんな気分自転車はしてくれる。

最後に、今回はまだ不十分でしたが、次回は、より一層充実したものにしたいと思いますので、多くの学生の参加を希望します。



学 園 教 養 講 座 (Cultural Seminar)

に つ い て

本講座は、学園の教育研究が単に知識・技術の伝授だけに留まらず、時代の移り変りの激しい現代社会の中にあつて、広い視野をもち健全な人生観および正しい判断力を養うことを目的として、社会のあらゆる分野で活躍しておられる学園内外の有識者を講師に招き開講している。

これは教職員はもとより、これからの時代を担う学生生徒にとって大切であるとの鶴総長構想のもとに昭和49年11月に発足し、今日

にいたっている。これはまた本学の建学精神ならびに教育方針を具現化するものとして本学園の特色となっている。

ここに、

1. 学園教養講座の開催意義 鶴 襄総長
2. 第1回（昭和49年11月）から第26回（昭和52年12月）までの演題と講師
3. 第23回「技術者の社会人としての役割」三戸左内先生の講演概要を参考までにご紹介いたします。

1. 学 園 教 養 講 座 (Cultural Seminar)

の 開 催 意 義

鶴学園総長 鶴 襄

学園のよき伝統または学風というものは一朝一夕にして出来あがるものではなく、学園内の教育・研究、環境、教職員、学生・生徒の気質等々あらゆる要素が長年積重ねられて、徐々にしっかりとつくられるものであります。その中で、建学の精神及び教育方針がいかに学園内に具現化されていくかということとは非常に大きな要素となるのであります。

本学園の建学の精神「教育は愛なり」及び教育方針「常に神とともに歩み社会に奉仕する」人材の育成をより深く理解する一助とな

るように始められたのが、この学園教養講座 (Cultural Seminar) であります。

本学園の教育が単に知育・技術の伝授だけに留まらず、時代の移り変りの激しい現代社会の中で、広い視野に立って物事をみつめ、物事の根本を理解して社会の現象を判断する訓練を欠いではならないのであります。そのため各校のカリキュラム以外に社会のあらゆる分野で活躍してられる人々から直接に話を聞き、一般教養を身につけることは教職員はもとより、これからの時代を担う学生、生

徒が豊かな常識を身につけ、あらゆる教養をもとにしてつくられた自らの社会観、人生観を持って社会に出てゆき、はじめて社会に奉仕し、貢献することが出来るのであります。

この講座は以上のような主旨にそうように、人生哲学・学問・文化・趣味等について幅広い教養を身につけることを目的としており、年間を通じて学園内外から講師を招き、ユニークな人生経験のもとに語られる講演と座談を行うものであります。

今後とも皆様方のご理解とご支援を頂き、末長く存続させていきたいと思ひます。

ここで、学園教養講座の別称「Cultural Seminar」について説明しておきたいと思ひます。

Culturalという言葉は辞書で引くと教養・修養・文化・耕作・栽培等の意となっていますが、語源をたずねると、もともとラテン語(Cultura = Colo)では農業から出た言葉であつて第一義として耕す、栽培する意味であります。硬い土を柔かくし、中にまごつてゐる石ころや木の根を取り去り、さらに物がよく育つようにあらゆる養分をあたえてよい土地をつくり、穀物や果実等が実るようにすることです。

そこで思ひ出すのは聖書の中に、人の心を土地にたとえた「種まき」の話があります。

第1の種は「道ばた」に落ちて芽さへ出すことができません。

これは全く聞く耳をもっていない喧騒な街かどに立っている人の心に似て、好奇心や気ばらしに心が支配されていて必要なことには無関心、無感動な心の土地です。

第2の種は「土のうすい岩地」に落ちてす



ぐ芽を出したが日がのぼると焼けて根がないために枯れてしまいます。これは感情だけで受けとめて、熱しやすくさめやすい心の土地です。感激した時に立派な決心をし、小さな困難にぶつかるにあつさり全部やめてしまう人にたとえられます。

第3の種は「いばらの中の土地」に落ちて、いばらが伸びてふさいでしまうので立派に成長することも実を結ぶこともできません。

これは世の心づかいと富の感わしとで心がふさがれ、正義も愛もかげをひそめてしまうひ弱な心の土地です。

第4の種は「よい土地」に落ちて実を結び30倍、60倍、100倍になるのです。

これこそよく耕され、充分な養分のあたえられた心の土地です。

頑な心を柔かくし、冷たい心を温ため、心の中にある横しまな欲望や利己心を取りのぞき、さらに学問や道徳、芸術、宗教、社会、

スポーツ等の養分を加えて円満な人格をつくりあげることは修養の道であり、かかる努力を生涯つづけて行く人が真の教養人であり、文化人であると思います。

こうした意味でもこの学園教養講座 (Cultural Seminar) が皆様方の心の糧となり、新たな興味を呼び起すものならんことを願うのであります。

2. 昭和49年11月(第1回)から

昭和52年12月(第26回)までの

演 題 と 講 師

- | | |
|---------------------------------|--|
| 第1回 「本学園の建学精神、教育方針と私学の存在意義について」 | 講師 ニューヨーク州立大学英文学
准教授 文学博士
Richard John Londraville先生 |
| 講師 本学園総長 鶴 襄先生 | |
| 第2回 「留学生の目でみた日本」 | 第9回 「海外視察の印象について」 |
| 講師 アルゼンチン留学生
アレハンドロ・オラシオ君 | 講師
本大学教授 石田重美先生
附属広高・中学校長 山本良雄先生
附属工高教頭 松田幸一先生
附属工高教諭 浜田重雄先生 |
| 第3回 「サウジアラビアの現状について」 | 第10回 「日米国民性の相違について」 |
| 講師 中国電気工事(株)副社長
上久保武夫先生 | 講師 芸備倉庫(株)社長
古川 浩司先生 |
| 第4回 「野球と人生」 | 第11回 「運・鈍・根」 |
| 講師 中国新聞社(スポーツ担当)
津田 一男先生 | 講師 本大学学長 理学博士
前川 力先生 |
| 第5回 「わが子の愛の教育20年」 | 第12回 「欧米旅行の印象」 |
| 講師 (株)とうじ社長
冬至堅太郎先生 | 講師 本大学教授 工学博士
葛西 重男先生 |
| 第6回 「愚者の哲学—私の歩いた道—」 | 第13回 「ニューヨークの生活」 |
| 講師 山陽女子短期大学教授
文学博士 木村 光徳先生 | 講師 ニューヨーク州立大学准教授
文学博士 John Schwindt先生 |
| 第7回 「私の研究を通じての創造性の開発について」 | 第14回 「教育の原点とその目標を語る」 |
| 講師 京都大学工学部教授
工学博士 高木 俊宜先生 | 講師 本大学教授 教育学博士 |
| 第8回 「アメリカの文化と文学」 | |

川地 理策先生

第15回 「日本料理の歴史と現代」

講師 日本料理店あまぎ店主

金藤万佐則先生

第16回 「技術のマネジメント」

講師 慶応義塾大学ビジネススクール
助教授 古川 公成先生

第17回 「日本の民主主義教育はこれでよい
か」

講師 広島女学院理事長
教育学博士 広瀬ハマコ先生

第18回 「エレクトロニクスかイオニクスか」
—研究教育に関する雑感—

講師 京都大学工学部教授
工学博士 高木 俊宜先生

第19回 「アメリカ人の生活見たまま」

講師 広島大学理学部助教授
理学博士 中野 光雄先生

第20回 「近頃思うこと」

講師 私立尾道高校長

佐藤 暢三先生

第21回 「人を生かす行動科学」

講師 本大学教授 文学博士

正戸 茂先生

第22回 「文学のすすめ」

講師 本大学教授 文学博士

大原三八雄先生

第23回 「技術者の社会人としての役割」

講師 大阪市立大学名誉教授

工学博士 三戸 左内先生

第24回 「思い出の人々」

講師 本大学教授 理学博士

竹野兵一郎先生

第25回 「技術者への道」

講師 本大学教授 工学博士

大脇 健一先生

第26回 「日米国民性の相違について」

講師 芸備倉庫社長

古川 浩司先生

3. 第23回 学園教養講座の概要

(Cultural Seminar)

演 題 「技術者の社会人としての役割」

講師 大阪市立大学名誉教授

三 戸 左 内 先 生

ます。

日本には、古くはたくみ(工)という言葉
があります。そのたくみという言葉に含まれ
ている意味はちょうど私達がつかっている
Technology またはそれより少し前の観念で
Skilled という言葉と相通じるところがあり

私達は技術者とか社会という言葉を用意
に使いますが、このテーマに入る前に、その
言葉の定義をしておくことは非常に重要なこ
とであります。

先ず、技術者という言葉の定義について説
明し、技術者とは何かを探ってみたいと思ひ

ます。

しかしながら、今私達が使っている技術者、技術という観念は欧米文化が日本に定着してきた観念であります。英語の Technology, Engineering, Skilled, Technique を一様に技術と訳されていますが、それらは本来ちがった意味をもっており、その人称化した技術者の意味も差異があります。

Skilled person はある種の技術を何度も繰返しつかっているうちに習熟した人。

Technician, Technist はその技術を日常の仕事とする人で、自分の仕事の技術的な細部にわたってたくみな人。またテクニシャンといって非常に技巧をこらす人という意味も含まれている。

Technologist は普通に、私達が技術者といっている人で、より高度の技術を体系的あるいは科学的知識として身につけている人。

Engineer はかつてエンジンを操作する人という説もあった。今日の Engineer を定義するのは非常に難しいが、新しい Engineer (技術者) の定義は「物理学、化学等の自然科学における法則に準拠し、数学的論理を用い、更に生物学、サイバネティクス、心理学の授けの上に、経済学と社会学の理解のもとに、自然の物質的、エネルギー的資源を加工し、工夫と創意により人類に有用な“物—設備、器具—”又はシステムを設計し作り出す者、これを Engineer と云う。Engineer に Technologist 又は Technician と重複する所はあるが、より広く深い意味を有する。」といわれる。

やや宗教的な考え方からいうと「もし、神格をもつ創造主がいるとすれば、その創造主



がこの宇宙、地球をつくったのには何かの目的があったにちがいない。その目的を達成するために創造主がつくり残したものが非常に沢山ある。それを創造主に代って片腕となつて補いつくっていく (Creation) ものが Engineer である。したがって Engineer は創造主の心を知る努力をして、少しでも創造主の意志をみきわめて宇宙を完成していくのである。」

さて、今日の工科大学において、技術者をつくるという意味は前述した Technician ではない。また Technology をあつかう人であるが単なる Technologist でもない。新しい Engineer である。

そこでテーマの「技術者の社会人としての役割」に注目すると、Engineer の行為が後々になって悪に通じ、社会を破滅させるようなことにならないため、当然 Engineer には「良心に対する目覚め」が必要な要素となっ

てきます。それにはまた善悪の基準が必要です。この問題は私達が先祖から受けついで道德律とかあるいは宗教観によるものをそのままのみにすれば気楽ですが、現在のヤング層がもし科学技術というものによって旧来の道德律、宗教を完全に否定しさるようになった場合、科学技術は新しい善悪の道標をあたえずにはおしておくことは無責任である。そこで一科学技術者が次のような道標を提案している。「人類社会ならびに人類社会をとりかこむ環境（動物、植物、鉱物、海、山等々）の成長発展を助長するような行動を善といおう。そしてそういったものの成長発展を阻害するような行動の一切を悪といおう。」と定義している。

次に一般論として技術者の人間としての問題と必要な形成要素をあげておきます。（説明省略）

技術者の人間としての問題点

1 技術者の長所

1) 真面目さ、2) 正直、3) 論理的、分析的、4) 一本気、5) 忍耐、6) 執着心

2 技術者の欠点

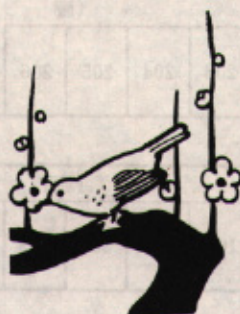
1) 非社交的、2) 内攻的、3) 全体的に

見ない、4) 統卒力の欠除、5) 経済観念の欠除、6) 社会観念の欠除、7) 情緒に偏りがある、8) 芸術性に乏しい、9) こだわり勝ち、10) えこじさ、11) 自己表現が下手、12) タイミングの観念の欠乏、13) 意志決定の明確さに欠ける。

技術者に必要な形成要素

1. 専門知識—共通基礎知識、特殊専門知識
2. 専門外知識—一般常識、経済、社会、心理学、文学
3. 応用能力—Case Study による能力発揮の即応性
4. 解析能力—幅広い論理
5. 判断力
6. 総合力—平衡感覚
7. 創造力
8. 想像力
9. 意志決定力（決断力）
10. 行動力、持久力（実行力）
11. 表現力、説得力
12. 情緒、均衡性
13. リーダーシップ、マネジメントの能力
14. 盛んな意欲。

技術者を養成する大学においては幅広い人間教育、特に技術者の欠点をおぎなう人文学教育の必要性を強調され、工業教育のあり方に示唆をあたえられた。また先生の人生経験を通しての理学教育と工学教育の分析、相異などを興味深くお話しされた。



大学だより

クラブハウスの建設

本学では学生諸君のクラブ活動のための施設には特に意を用いてこれが充実に力を入れている。

現在、次のような施設がある。

クラブハウス（校庭内）2棟

弓道場（大学西隣り）

ヨット艇庫（宮島口東隣り）

体育合宿所（ ）

自動車々庫（大学東隣り）

ボート艇庫（広島市庚午）

武道館（校内）

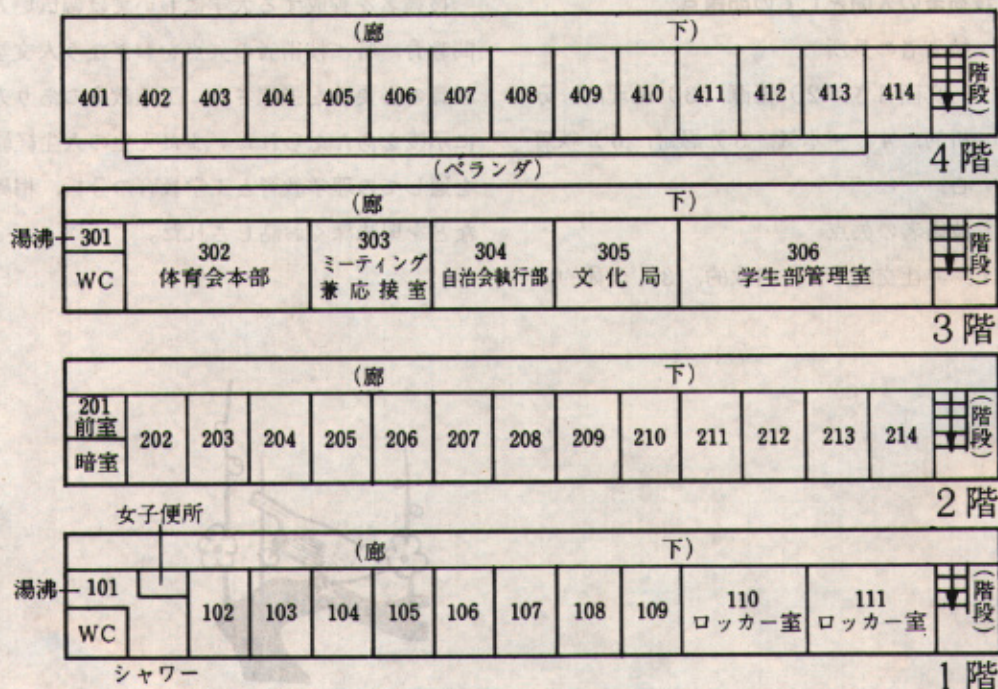
これらの施設のうちクラブハウスは、4階建1棟と、2階建1棟とがあり、学生の利用

に供しているが、段々とサークルも増え狭隘となったので2階建の方をとり除き、その跡地に4階建の建物を新築することになり現在工事が着々と進んでいる。

この建物の完成は本年の4月末の予定であり、全体の延面積は約1500㎡となっている。部屋数は、1階11室、2階は14室、3階は6室、4階は14室で合計45室となっており、今回の建物には、ロッカー室の外3階には体育会本部室等の室が設けられている。

現在は体育サークル33、文化サークル22あるがこれ等のサークル活動は一段とその成果が期待される。

15号館新築平面略図



美 し き つ つ じ の 学 園

津 村 喜 代 治

1 新任のあいさつ

4月11日付で機械工学科に就任いたしました。教職関係の仕事は全く素人であり、諸先輩のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

2 私の略歴

昭和2年広島市猿楽町（すでに町名が変更となったまぼろしの町ですが、紙屋町第一産業付近です）で取れました広島っ子です。昭和23年旧制高等工業を卒業し、地元の東洋工業に入社いたしました。（日産自動車の採用通知を2日遅れで入手したため、現在までの様な経過をたどってきましたが、何れがよかったかそれは神のみが知る運命です。）昭和38年50才の手習ならぬ40才の手習のため、近畿大学の3年に編入学し、最小の必要単位を取得して卒業しました。

工業界の経験は29年ですが、現場の技能者としてまた技術員、研究員そして管理者として、機械加工、超精密加工、精密測定、車両の排出ガスの管理、完成車両の品質保証業務など、バラエティーに富んだ業務を担当してまいりました。

昭和45年に入社以来コツコツやってきました研究をまとめ、東北大学へ「ブロックゲージの結合精度の向上」というテーマで学位論文を提出しました。この研究は私個人というよりか、東洋工業の超精密技術に対して与えられたものだと思っています。

3 本学就任について

私の上司でありまた恩師である故田中重芳先生（山口大学工学部長より停年退職され、東洋工業の技術顧問として勤務されております。工作機械関係の権威者であり、先生の著書は本学の機械工学科のテキストとして使用されています）が、「工大から工作機械関係の先生の推せん依頼があり君の経歴、経験を考慮して推せんしたい。あとは君の判断にまかせる。現在君はあまり勉強していないようだ、もう一度頑張ってみろ。」病床からきびしい口調でいわれました。学位を授与され、仕事が忙しいからという理由で本当に勉強していなかったことを深く反省しました。

上司、友人など多くの人に相談しましたが、ほとんどの人にすすめられ、（ただ1人手相見のおっさんだけが、？反対したことを付記しておきます）就任の決意をかためました。

4 私の尊敬する師

私の学位論文主審教授、東北大学藤井康治博士は（東大卒後日産自動車に勤務し、戦後東北大学において成瀬先生に師事された方です。私の研究の完成まで約10年間常にいわれた事は、「如何なる優秀な理論でも工業的に応用されなければ無価値である、工業的に応用されその効果が認められるような論文を完成させること」でした。この言葉はその後工業界の管理職の仕事にも非常に参考になり、今後の研究の基本的理念としたいと思っています。

ります。

5 就任1カ月の感想

美しき躑躅の花にかこまれた学園、広島近郊でその環境など立地条件の申し分のない大学であります。

私は過去において金属と油との親和性について研究した事があります。特定の金属はその仕上面のミクロ的形狀を如何にかえても、油との親和性は改善されず、立派な表面処理技術であっても工業的に採用不可能という結論を出したことがあります。

前述した環境はもちろんの事、総長以下諸先輩の親切な指導、就任にさいしての法人局の適切な説明会、学生諸君の礼儀正しさ、

卒研究生のまじめな勉学態度、担当先生の公私にわたるご指導など、本当に親和性にとんだ大学であると痛感しました。

就任1ヵ月余工業界で経験したことをどういう形で講義中に入れて生かして行くか、講義をどのように進めて行けば、学生は授業中の学問という情報を有効に in-put してくれ、またこの知識をいかに有効に out-put して利用してくれるか、教職1年生の大きな課題だと思っております。

今後楽しい時も、苦しい時も、昭和52年の春、工業大学の学園で美しく咲いた躑躅の花を思い出し、力強くあゆんで行く決心です。

(機械工学科教授)

ツメ込み教育大賛成

林 公 重

私が建築学科の主任教授を仰せつかって以来、丁度一か年になります。今まで何度か、何か書けと言われて来ましたが、何分、極度の筆無精で、然も、文章が極めて下手ときていますので、何とか言い逃れして来ましたが、今度は、どうしてもこうでも新入生への学習指針とか要望について書かねばいかぬ由なので、駄文を承知で思い出すままに鉛筆を取り上げてみました。

私が常に感じていることの一つに「ツメ込み教育云々」と言う流行語がありますが、この言葉を聞く度に、見る度に、何か奇異な感じを受けます。極めて単純に真正面から受止めるためでしょうか……。その言葉には、なんだか人間の頭脳は無理にツメ込むと働きが鈍くなる……。と言う風に聞こえる場合が多

々あります。

或る時、私の古い教え子の一人がやって来て、この教え子は、有名大学への進学率の高い広島私立高校の卒業生ですが、曰く「私は高校時代受験勉強のためツメ込み教育を受けたので、大学入学以来卒業後も、頭脳的に伸びなやんで居るように思われます」と。

私は、自分の過去を反省しながら、即座に「君は大学に入学して、これで受験勉強は全て終わったと安心して、以後の努力を怠っておるのではないかい……？頭脳には、常に新しいものをツメ込んでやらないと、ユニークな発想は生れないよ」と言ってやりました。その卒業生は笑って頭を掻いていましたが！！

確かに系統立たない、無茶な、所謂ツメ込み教育は、百害あって一利もないと思います

が、ちゃんと系統立ったツメ込み、昔からよく言われておる「クソはクソ袋へ!! ミソはミソ袋へ」と順序よくツメ込んでおけば、引出すにも或は応用するにも、大変楽で、大いにツメ込んで置くべきであり、私は、このようなツメ込み教育は大賛成なんです。然し、若し前記したような「ミソもクソも」一緒くたにしたツメ込み教育であれば、これは大変なことで無意味なツメ込み教育であるとしか考えられません。

ツメ込み教育とは、一般的には後者のことを言うのだと単細胞的に考えていますが、巷に聞くツメ込み教育云々は、多くの場合、両者を混同し、時には我田引水の的な考えの基に、或は意味も弁えないで時の雰囲気迎合的にツメ込教育反対論を唱えて居る人が可成り多いのに驚かされます。

ツメ込みの裏をかえせば、日々コツコツと秩序ある努力を積み重ねることであると考え

るのですが、どうでしょうか。勿論、如何に多くツメ込んでも病弱では何の役にも立ちません。昔から「命あってのもの種」とか言いますからね。健康に留意することは当然のことです。

現在の社会は、猛烈社員より効率社員を重んじると言いますが、効率をよくするには状況判断が正確でなければなりません。そのためにも斬新な知識をどんどんツメ込んで置かないと困るのではないのでしょうか。

実行するには体力が必要であり、人に接するには思いやりが必要であることは、今更言うまでもないことと思います。新入生への学習指導とか要望とは、大分かけ離れておるように思われますが、良い意味でのツメ込み教育は学習の基本であると思いますので、特に要望しておきたいことの一つです。

(建築学科 主任教授)

ち え の 光

辰 宮 栄

大学とはちえの光を高度にみかく所だと思っている。世の中にはうそとぎまんが入り乱れている。ちえの光で照らしてうそとぎまんを見ぬかないと世の敗残者となる。「弱者救済」などという。こんなことばは自己を強者と意識する者の思い上がったことばなのだ。左右前後をよく見まわしてごらん下さい。ほんとうに弱者が救済されているだろうか。そんなうそとぎまん満ちたことばをふりまわすよりも、少しでも自分より弱いと感じる人にだまって救いの手をさしのべる方がましで

ある。電車やバスの中で赤ん坊をかかえている婦人に席をゆずる人が少い現在の世の中なのだ。老人を押しつけてでも席にどっかと坐る大学生が、大学内でヘルメットをかぶり、鉄棒をふりまわして英雄を気取り、大学教授を阿呆呼ばわりして自分の低能をおおいかくす。これもぎまんの一つの例だ。

世の中はうその迷路だ。商人も役人も工場経営者も巧みにうそをつく。うそをついて他人をだまして自分の利益を計り、腹の中では生存競争の勝利者だと自負している。うそを

巧みにつく者が世の中では富み栄え、また高い社会的地位につく。世の中にはうそを見抜くちえの光があまりにも弱々しいのだ。政治家たちのうそときたら耳に綿でせんをしたくなる。プロレタリア革命などと呼んでいる政党が世界の至る処にある。現在の日本でプロレタリアと言えば大学出の若いサラリーマンや月給では本も買えない大学教授を停年退職してやっと3LDKのマンションを買ったら退職金が無くなってしまったという老学者等々ではあるまいか。こんな連中はプロレタリア革命とか世界同時革命などということばを聞くとむかっとする。ばかも休み休み言いたまえといった心境だ。

大学とはちえの光を高度にみがく所だと断定してよいだろう。戦前から大学は真理の探求の場であると定義されていた。そのような定義をふり回した戦前の大学教授や種々の評論家たちが、戦時中は軍閥のごきげんとりに汲々とし軍国主義謳歌の講義をしたり評論を發表していたのだが終戦となると180度転回して自由主義とか民主主義などといった歯の浮くような念仏を急に唱え始めたことは30余年過ぎた今でさえも記憶にまざまざと残っている。これも彼等が世の敗残者とならぬためのうそでありぎまんであったのだ。

ちえの光を高度にみがくべき大学の教室内でもうそとぎまんが横行している。出席を取る時に「ハイ」という返事があり、授業が始まって機関銃的に学生に質問の弾丸をとばすと、返事をしたはずの学生の姿は教室には全く無い。幽霊が返事をしたという真実がばくろされる。うそとぎまんを見抜くちえの光を高度にみがくべき大学の教室内でさえも、う

そとぎまんが横行しているのが現実の姿である。プロレタリア革命などというしらじらしいうそとぎまんにへどをはきたくなる一人のプロレタリアの英語の老教授の前ではうそとぎまんは通用しないのだ。幽霊が物をいうのは物語や劇や映画の中だけだと学生諸君は心得てほしい。

大学の教室は幽霊の出るうそとぎまんの劇場ではない。学生諸君よ、うそとぎまんの拒否者たる英語の老教授は、うそとぎまんに教えないように日夜心をくだしているのだ。既に教えた英語にうそは無かったかとふと夜中に飛び起きて電気をつけて教科書を読み直してみるのだ。ちえの光を学生に植えつけようと日夜努力している老大学教授はうそとぎまんには断じて妥協しないことを知って欲しい。教室に出没する幽霊諸君はやがては「不可」をもらい、卒業を延期されて親を泣かすようになることを覚悟して欲しい。人生は長い。4年のところを6年辛抱強くやるのもよい。但し親の納得ずみという条件がつく。

大学はちえの光を高度にみがく所である。昼休みの時間に教科書やら他の英語の材料を持参して研究室のドアをノックして入ってくる学生が多いのに驚いている。「求めよさらば与えられん」とキリストは教えた。ちえの光を求める者を拒否することは私の趣旨に反する。近頃は食堂へ行って300円のB定食を食べるのをやめて(食堂経営者にはすまないが)、大学へ来る途中で1袋100円のパンを買って来て、昼食時間にはそれをかじりながら待っている。学生諸君よ、遠慮なく来たまえ。(プロレタリアの老教授には1日につき200円の節約になる。一石二鳥といったところか)。求めよさらば与えられん——だ。

同窓会本部だより

昭和52年度議事録

幹事会

○昭和52年度第1回幹事会

日時：52年5月28日 13:00より

場所：同窓会事務室

出席者：17名

- 議題：1. 52年度活動方針について
2. 会報発行について
3. 体育祭への援助について
4. 鶴虎太郎奨学会への寄付について
5. 同窓会奨学金給付者選考について
6. その他

○昭和52年度第2回幹事会

日時：52年6月25日 13:15より

場所：同窓会事務室

出席者：13名

- 議題：1. 大学への事務委託について
2. その他

○昭和52年度第3回幹事会

日時：52年10月29日 13:30より

場所：同窓会事務室

出席者：9名

- 議題：1. 会誌発行について
2. 支部活動の促進について
3. 大学への事務委託について
4. その他

○昭和52年度第4回幹事会

日時：53年1月20日 12:45より

場所：同窓会事務室

出席者：13名

- 議題：1. 卒業記念品について
2. 会誌発行について
3. 支部活動の促進について
4. 名簿整理について
5. その他

役員会

○昭和52年度第1回役員会

日時：52年6月18日 18:20より

場所：労働会館

出席者：15名

- 議題：1. 総会について
2. 同窓会奨学金給付者の選考について
3. 会報について
4. 52年度活動方針について
5. 体育祭援助について
6. その他

○昭和52年度第2回役員会

日時：52年11月12日 18:30より

場所：労働会館

出席者：14名

- 議題：1. 大学祭への援助について
2. 大学への事務委託について
3. 会誌発行について
4. 支部活動の促進について
5. その他

— 昭和52年度会計中間報告 — 昭和53年2月10日現在

項 目	予 算	支 出	残 高
会 誌 発 行 費	2,110,000	—	2,110,000
会 報 発 行 費	500,000	499,020	980
総 会 開 催 費	430,000	349,980	80,020
在 学 生 援 助 費	650,000	453,000	197,000
卒 業 記 念 品 代	500,000	—	500,000
通 信 費	100,000	44,130	55,870
消 耗 品 費	200,000	40,535	159,465
会 議 費	200,000	82,490	117,510
役 員 手 当	122,000	16,500	105,500
支 部 費	100,000	—	100,000
交 通 費	70,000	34,700	35,300
奨学基金繰込み金	400,000	343,000	57,000
備 品 費	50,000	—	50,000
委 託 費	200,000	27,800	172,200
調 査 費	100,000	—	100,000
鶴 奨 学 会 寄 付 金	100,000	100,000	0
予 備 費	300,000	25,350	274,650
合 計	6,132,000	2,016,505	4,115,495

同窓会奨学金報告

52年度同窓会奨学生決定!!

同窓生ならびに教職員の皆様の温いご援助のもとに、第2回の同窓会奨学生を決定することができました。

今年の志願状況は別表の通り120名となり、12倍の競争率に達し、同窓会へ大きな期待が寄せられているものと思います。今後とも皆様のご協力をよろしくお願い致します。

尚、奨学生の選考にあたっては厳選の結果、6月18日の役員会に於いて下記の10名が決定致しました。

学生番号	氏名	学科
504058	高野 俊彦	土木
511030	坂本 修	電子
515083	花田 良二	建築
521077	中川 裕之	電子
522080	中沖 進	電気

523059	田中 静香	機械
524023	大野 秀生	土木
525023	沖 丈博	建築
525066	田中 慎吾	建築
525031	加藤 雅克	建築

昭和52年度奨学生出願状況

	1	2	3	4	計
電子工学	12	6	0	0	18
機械工学	21	5	2	0	28
電気工学	11	4	1	1	17
建築学	17	7	2	4	30
土木工学	11	6	1	1	19
経営工学	4	2	2	0	8
計	76	30	8	6	120

同窓会奨学金寄付者一覧 (S 51年4.6～S52.9.14寄付分)

電子工学科	42年卒	伊藤 公生	46年卒	隅本 聖	48年卒	赤木 博史
38年卒 岡田 圭子	"	高岡 行雄	"	竜川 司治	"	上村 和穂
" 木谷 俊秀	"	馬頭 睦夫	"	田中 幸夫	"	鶯飼 邦司
" 熊崎 康之	"	松本 正典	"	奈須 秀廣	"	大谷 等
" 田中 功	43年卒	粉岡 信浩	"	平原 満典	"	末綱 信武
" 古本 克之	"	川口 昌廣	"	藤井 博	"	寺本 司
" 若松 幹治	"	野中 輝夫	"	藤間 俊朗	"	徳保 祥明
39年卒 原田 成子	44年卒	木村 繁基	47年卒	小島 耕治	"	浜岡 ルリ
" 道口 郁男	"	徳原 雅人	"	進藤 忠行	"	弘地 敏
41年卒 石川 勲	"	比谷 英俊	"	竹内 明文	"	平野 正治
" 植田 克幸	"	渡辺 博之	"	縄田 雅雄	49年卒	伊勢本弘志
" 大下 学	45年卒	上田 昭典	"	藤網 正文	"	上野 カツ
" 山本 希生	"	森田 正治	"	本間 健	"	桂 清

49年卒	柴田 伸也	47年卒	高橋 秀典	43年卒	小山孝太郎	49年卒	小田 宏
"	竹内 世基	"	西川 克治	"	鈴木 寛	"	大道 房志
"	信原 俊夫	"	松井 敏明	"	竹尾 克典	"	永田 仁
"	松村 重信	"	松田 孝夫	"	田中 一誠	"	新畑 耕三
"	水野 倫	"	山下 義弘	"	藤井 実	"	林 純一
"	皆川 弘	48年卒	門田 重紀	"	脇田 照彦	"	肥後 知行
"	吉富 積	"	佐々木英児	"	吉見 伊織	"	新原 健五
50年卒	有田 英夫	"	寺内 好隆	44年卒	島田 毅	"	矢野 昭一
"	岩佐 隆男	"	福井 洋雅	45年卒	梅木 富明	50年卒	家久龍太郎
"	小早川武文	"	藤村 洋	"	上原 龍三	"	牛尾 義昭
"	畑本 俊彦	"	三上 隆幸	"	川崎 栄次	"	沖根 忠敏
"	宮本 弘治	49年卒	台木 勝	"	倉内宏太郎	"	須賀 博
"	湯浅 操	"	江原 壽男	"	曾田 昭夫	"	鈴木 徹
51年卒	小間 弘二	"	岡本 将文	"	高市 茂	"	中尾 寿
"	斉藤 英之	"	小林 和明	46年卒	越智 孝利	"	中村 克美
"	塩谷 正幸	"	田中 信一	"	河村 保男	"	藤井 清
"	橋本 宏	"	為定 孝之	"	倉橋 幾久	"	山田 龍彦
電 気 工 学 科		"	中尾 政芳	"	平原 秀範	51年卒	横林 照之
42年卒	黒川 剛	"	中村 敏明	"	吉見 照昭	"	佐藤 哲也
"	熊谷 元子	"	前田 晃	47年卒	沖 利明	土 木 工 学 科	
"	重松 芳幸	"	松浦 健二	"	井ノ口利秋	44年卒	大志 茂孝
"	田頭 登	"	宗正 隆文	"	高越 順一	"	景山 敏則
"	原田 義治	"	和田 友昭	"	高見 政則	"	加世田節郎
43年卒	石田次久郎	50年卒	植野 正信	"	田辺 勝芳	"	小徳 道夫
"	土井 義介	"	佐野 遵	"	橋本 和秋	"	水野 次恵
44年卒	西岡 要	"	上段 修	"	藤井 和男	"	山内 達
46年卒	斉藤 忠	"	平松 勇雄	"	八木 猛	"	山内 達
"	柴田 恭助	51年卒	亀谷 英紀	48年卒	石田 領一	45年卒	石丸 東海
"	谷 秀夫	"	塩谷 正幸	"	伊藤 徳行	"	越智 則幸
"	中田 時生	"	新田 雅俊	"	金子喜久雄	"	小坂 猛彦
"	引地 正之	"	西尾 浩和	"	菅 富士雄	"	佐賀 勉
47年卒	鍵山 守男	機 械 工 学 科		"	中村 政春	"	山本 雄起
"	岸本 秀生	41年卒	三吉 龍次	"	福川 和博	"	渡辺 直省
"	迫田 静雄	43年卒	有岡 康毅	"	三戸 博	46年卒	大前 直明
"	進藤 壮二	"	梅村 勝三	"	山本 善一	"	竹内 太郎
				49年卒	岩田 一徳	"	田中 純三

46年卒	広田 秀夫	50年卒	林 憲章	48年卒	植木 雅士	49年卒	本馬二三夫
"	米田 育正	"	光宗 政治	"	尾野本 悟	"	峯岡 俊治
47年卒	太田 泰裕	"	村上 誠一	"	金井 博明	"	味沢 重明
"	皿田 俊夫	51年卒	牛尾 弘志	"	木村 信行	50年卒	板野 修一
"	平松 利雄	"	久保 俊秀	"	久保田 実	"	迎川 和康
"	向井 文雄	"	高橋 義幸	"	河野 明男	"	清野 泰志
"	村上 和雄	"	西本 能成	"	竹中 彰則	"	大下 芳生
"	吉井 進	"	新田 勇壮	"	中村 正明	"	小森 厚
48年卒	大森 一	"	安田界優男	"	荻山 俊郎	"	斉藤 竜典
"	小野 直幸	"	沼田 邦昭	"	橋本 善充	"	菅 邦男
"	久保田正明	"	渡辺 正伸	"	原垣内実穂	"	中岡 昇
"	小林 俊規			"	比枝 昇三	"	藤井 康
"	斉藤 康德	建 築 工 学 科		"	広安 耕紀	"	正原 卓巳
"	坂川 清志	44年卒	秋本 孝	"	福井 洋雅	"	松田俊一郎
"	高本 寿夫	"	大松 恒一	"	真野 秀明	51年卒	岸本 司郎
"	竹本 宏士	"	大本 正明	49年卒	秋山 雅芳	"	続谷 正
"	仁井田均則	"	河面 好子	"	大石 和幸	"	藤井 成巳
"	濱崎 直文	"	梶谷 忠治	"	小篠 正彦		
"	吉中 強志	"	寺岡 貞義	"	川西 秀和	経 営 工 学 科	
49年卒	石井 達美	"	野宗 一郎	"	北村 彰朗	45年卒	新保 栄一
"	大島 唯司	"	松浦 保彦	"	黒木 章治	"	西田 弘展
"	沖原 泰彦	"	三上 照子	"	倉田 正義	48年卒	国広 賢次
"	茅野 典男	"	森田 広満	"	小西 堅	"	早稲本芳江
"	岸本 信周	45年卒	黒田 初保	"	柴崎 謙次	49年卒	児玉 進一
"	浜田 公慈	46年卒	青葉 憲明	"	住田 雅幸	"	西川 勝文
"	三浦 光政	"	小迫 昭三	"	角田真佐世志	50年卒	大田 和之
50年卒	内田 幸夫	47年卒	木谷 和生	"	竹内 健	51年卒	住田 一彦
"	中西 博昭	"	村田 卓雄	"	畑 幸成	52年卒	小牟礼国広
"	花房 俊行	48年卒	今田 博宜	"	兵頭 郁男	"	松下 辰男



広島工業大学同窓会会則

第一章 総 則

第1条 本会は広島工業大学同窓会と称する

第2条 本会は本部を広島工業大学内に置く、但し総会で必要と認めた場合に支部を置く事を得る

第3条 本会は会員相互の交誼を厚くし、かつ母校の発展に貢献することを目的とする

第4条 本会は前途の目的達成の為に下記の事業を行なう

1. 集 会

1. 会員相互の連絡並びに共助に関すること

1. 会誌、会報及び会員名簿の発刊

1. 母校に対する精神的・物質的援助

1. その他本会の目的達成に必要な事

第二章 会 員

第1条 本会は下記の者を以って組織する

1. 準会員 広島工業大学在学学生、その他役員会で適当と認められた者

1. 会 員 広島工業大学卒業生、但し広島工業短期大学卒業生を含む

1. 客 員 母校職員及び旧職員

第三章 役 員

第1条 本会は下記の役員を置く

1. 名誉会長 1名

1. 会 長 1名

1. 副会長 2名

1. 会 計 3名

1. 会計監査 3名

1. 幹事長 1名

1. 幹 事 若干名

1. 評議員 若干名

1. 書 記

第2条 本会の役員は次の方法で決める

1. 名誉会長は広島工業大学現学長を推す

1. 会長、副会長、幹事、会計、会計監査、評議員は総会で正会員の中から選ぶ

1. 幹事長は幹事の中から互選する

1. 幹事は総会の議決により母校出身の中から委嘱する

第3条 各役員はそれぞれ次の任務をもつ

1. 会 長 本会を代表し会務を統べる

1. 副会長 会長を助け会長に支障があるときは代理する

1. 会 計 会計事務に当る

1. 会計監査 会計を監査する

1. 書 記

1. 幹 事 長 会務を主掌する

1. 幹 事 会務を処理する

1. 評 議 員 会務を評議する

第4条 役員の任期は一カ年とし再任をさまたげない、但し欠員は役員会にはかり補充しこれによって就任したものの任期は前任者の残りの期間とする。

第四章 顧 問

第1条 この会に顧問若干名をおく

1. 顧問は総会の議決により適任者を委嘱する

1. 顧問は会の諮問に応ずる

第五章 会 議

第1条 会議を分けて定期総会・臨時総会及び役員会とする

第2条 総会は最高の議決機関で毎年4月に開く 臨時総会は役員会が必要と認めた時会長が招集する

第3条 総会は次のことを決める

1. 会則の変更と改正

1. 決算及び予算

1. 役員の改選

1. その他重要な事

第4条 役員会は会長が必要と認めた時招集し、次のことを決める

1. 総会に附議する原案

1. この会の運営に関する諸事項

1. その他緊急事項の協議

第5条 会議の議決は正会員の参加者の過半数をもって決定し、賛否同数の時は議長がこれを決定する

第六章 会 計

第1条 この会の会計細目は会計細則の定める所による。

第2表紙写真説明

新10号館は、14号館に中心のあった電気工学科の移転とともに、電子工学科についても現状のスペースの不足の補充も合わせて、新しく電気系の建物として建設され各部屋は実験、研究を中心とした構成になっている。

1階～3階までは、電気工学科の実験研究室で、5階は、電子電気共通の製図室になっている。

電子工学科は、4階にあり、各教員のデスクワークを中心とした部屋を中心とし

て、外に、ゼミナール等の可能な実験研究室、就職指導室、会議室がある。また、暗室や湯わかし場も完備した便利でスマートな建物である。

新10号館は、電気系の建物として、以前に増して電子、電気との交流、意見交換が盛んになりつつあり、新しい場の雰囲気が感じられる。

新館の規模は、鉄骨コンクリート5階建（1部平屋）で建築面積、3,795㎡である。

（写真は戸川写真店提供）

計 報

客員

松田和夫先生
（昭和52年6月11日）

河喜多能一先生
（昭和52年11月22日）

木村三郎先生
（昭和53年3月5日）



同窓会誌第12号発刊に
当り、諸先生、諸先輩、
各位の皆様に、お忙しい
中原稿を出していただき
深く感謝しております。

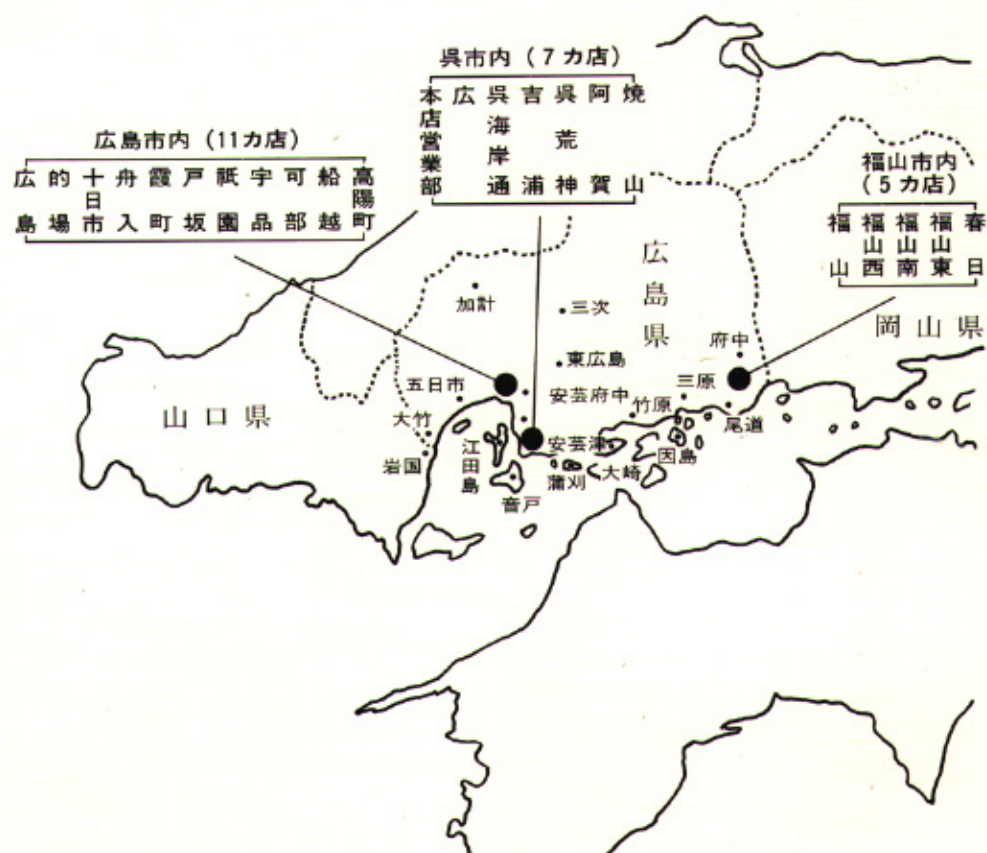
今後も同窓会発展のため、同窓会員諸氏の
御協力をお願い致します。

なお、本誌発刊において、期間と制約から、不備、不都合の点が多数あると思いますが
お許し頂きたく存じます。



会誌発行者 広島市外五日市町三宅
広島工業大学同窓会
表紙題字 広島工業大学総長
鶴 襄
発行責任者 中原重男
編集責任者 経営工学科
印刷所 広島電話印刷株式会社
広島県佐伯郡大野町太田新開6033
電話安芸大野(08295)5-2201代

伸びゆく《水ぎれ》の店舗網



ゆたかなくらしのために...

呉相互銀行

取締役社長 **力石一男**

本店 呉市本通2丁目
 電話 (0823) 22-2222(大代)